

研修報告書

| 記入日 | 提出日 |
|-------|-------|
| 11/28 | 11/28 |

| | | |
|---------------------------------|-----------|----------|
| 天気 | 報告者 篠田 知里 | |
| 平成 27 年 11 月 14 日～ 11 月 19 日 | 研修題目 | シンガポール研修 |
| 場所 シンガポール | 講師名 | |
| 時間 | | |

研修内容・学んだ事

○ 11/16 (月) キャタピラー幼稚園

近代的なビルの中にあり、3、4、5才（6才クラスもあるが、現在はない）、2、1才以下のクラスに分かれている。3、4、5才クラスは壁がなく、コーナーで空間が作られていた。今回は、2～5才クラスの部屋を見学した。

室内に入る際には玄関で、靴を脱ぎ、手足（足は裸足の人のみ）の消毒と、体温チェックをしていた。登園してくる子も同じように、消毒と検温をしているということであった。この幼稚園は2ヶ月～6歳までの子、100人ぐらいの子を預かっている。

シンガポールは12月が年度末で1月から新年度となる。幼稚園に通うことは義務ではない。けれど、親は子どもたちが小学校に行く準備ができているかを把握しておかなければならない。

行った次の日から新年度に向けて、クラス移行をするということであった。クラス移行では、子どもたちが自分のかばんや、クラスにあるおもちゃの中から、次のクラスに持っていくべき物を選び、持つて行くことで、子どもたちが参加して引越しを行うということだった。自分がオーナーになることで、自主性を持てるということから、そのようになっているということだった。

キャタピラー幼稚園では、1クラスに2人の先生が配置されていた。各クラスに英語を話す先生と、中国を話す先生が一人ずついる。シンガポールでは、英語、中国語、マレーシア語、タミール語などセカンドランゲージを重要としている。母国語の他にセカンドランゲージを幼少期から触れられるような環境作りがされている。

施設で働くスタッフの資格は、最低限として高卒であること、それに加えてチャイルドケアの資格や初等教育大学資格などを持っている人もいる。今のシンガポールの幼児教育の現状は、発展段階であるということであった。その為、スタッフの方は男性保育者がいるということに驚き、また感心を示していた。シンガポールの現状として、男性は一家の大黒柱として、稼ぐことを求められ、企業に就職することが多いということであった。

この施設ではキャタピラー・コープという大きな組織から出来ている。その組織の中で、大学機関と連携し、教育者を育てる事業も行なっている。

キャタピラー幼稚園に通う人は、周辺に住んでいる人が通っているが、うわさを聞き、遠くから来ている人もいる。宣伝はしていないが、人伝てにうわさを聞いて、預けている人もいる。

シンガポールの国土は狭く、住居に掛かる賃金は高い。キャタピラー幼稚園は建物の中にあり、狭い空間を広く見せるために、デザイナーに頼み、天井を高くしたり、壁をなくしたりと色々な工夫がなされていた。また、子どもたちが過ごす部屋にも、棚でコーナーを仕切ったり、絵本を見やすく出来るようなソファー（マット・丘のようになっている）を設置していた。

幼児クラスの奥には小庭があり、天井は屋根がないので、雨が降ってくると濡れる。（自然を感じられるようにしてある）砂場とクライミング（小・大）と玩具置き場があった。園庭という大きな広さではないが、砂場で遊べるスペースが確保されていた。

シンガポールは亜熱帯地域なので、トイレにシャワールームが設置されていた。

休み中は家や、ショッピングセンターで過ごす子どもが多いので、休み明け（月曜）は必ず散歩に行き、活動出来るようにしている。6才児は毎月金曜、図書館に連れて行く。また、話し合いをして時間割を決めている。

2才（20人）クラスは安心するのに仕切られたスペースが必要で、3、4、5才クラスの開放感のあるスペースとは別に壁で仕切られた1つの部屋で過ごしていた。オープンスペースだと圧倒されてしまうので、安心して過ごせる環境が必要ということであった。

水分などのボトルがカゴに入れて各クラス置いてあった。2才では哺乳瓶が混ざっていた。カップに移行するように伝えているが、親としては哺乳瓶が良いと思っている人もいるので、そこは尊重しているということであった。

靴箱や自分の棚には、子どもの顔写真と名前が貼ってあった。

障がいがある子に対しては、施設が普通の子と分かれている。また、障がいに対して、肉体的な診断はするが、精神的なものなど（自閉症など）3才以下は診断しないことになっているということだった。

熱がある子に対しては、37.5～8℃（個人差にもよる）でお迎えをお願いしている。その他には、咳や全身状態によっても連絡を入れることもある。また、お迎えが来るまで、隔離するような部屋もある。個人差があるため、一人ひとりの全身状態をしっておかなければならない。朝必ずしも、担任の先生がいるわけではないので、前職員が一人ひとりの子どものことについて把握している。

国としての概念では、シンガポール人として、国に貢献していくよう、人格形成を行なっている。シンガポールは教育熱心であり、学業と人格形成どちらも大事。

○11月17日（火）トゥー・バイ・トゥー・プレスクール&エンリッチメントセンター

この施設は高級住宅地の中にあった。マンションのような建物の中にあり、一階は乳児クラス1才6ヶ月～2才半と幼児クラスに分かれていた。

この園は、中国語を覚えるために来ている子が多く（白人系）遊びを通して、覚えていくような環境にしてあった。子どもたちは、聞く、話す、読む、書くという順番で覚えている。

乳児クラスには、豆豆班①は英語クラス（数えて8人）、豆豆班②は中国語クラス（7人）、各クラス先生が二人いた。英語の先生、中国語の先生とクラスに一人ずついる。

幼児クラスになると、読み書きをしていた。幼児クラスから入ってくる子はあまりいなく、乳児クラスから通っている子がほとんどなので、発音は自然と話しているということだった。6才から来ている子もいたが、やはりその子の発音が少し違っていたりもする。

この施設は午前中、幼稚園として使用、午後は空手や中国音劇、ダンス、数遊び、科学や美術など、

専門のクラス（プログラム）を学べるようにしてある。

小学校に行くためのガイドライン（小学校に行くまでにやっていて欲しいこと）に沿って運営している。

※カリキュラムなどは別紙参照

○ 11月17日（火）シンガポール日本人学校

中学校とは経営母体は違うが、交流は行なっている。例えば、職場体験など。行事や内科検診、歯科検診も行なっている。給食は和食の提供をしている。

卒園後の進路は、インターナショナル校に入学する子（大体1、2名程度）、ほとんどは日本人学校（小学校）に入園するか、日本に戻って小学校に入るかになる。

小中学校は日本人学校と連携しているが、幼稚園の方はどんな人でも入れる。けれど、書類などすべて日本語の物を渡しているので、保護者は日本語を理解している人でないと難しい。ハーフの子（父か母どちらかが日本人）が多いが、日本に憧れて入ってきた両方外国人の人は2名いる。

ほとんどの子は数年間シンガポールに滞在していて、その後また日本に帰国する人がいるので、日本に戻って困らないように、日本語のみ（セカンドランゲージはない）での日常生活を送っている。

先生は、ほとんど日本人だが、先生のアシスタントには現地採用を多くしている。現地採用を多くすることで、Sパス（ビザ・就労許可書）の受け入れが多く取れるようになっている。

保育料については、7、8割は企業が保育料を負担してくれている。2人目から兄弟割引（30ドル）がある。日本人会から要望があり、運営することになった。

体育館は1階体操ができるスペース（クーラー完備）、2階はホール（発表会などに使用）と分かれている。1階の体育館の様子を少し見学した。

給食室もあり、アレルギー児に対する除去食の対応もされていた。

施設内は敷地面積が広く、木もたくさん植えてあり、設備も整っていた。また、シンガポールには四季がないので、日本の四季を感じられるようにされていた。

延長保育は基本ないが、緊急時などには預かっている。だいたいの家庭で、共働きの人はメイド（ベビーシッター）を雇っている。

○タッチチャイルドケア保育園

公団住宅内にある施設。25年前にできた。団地内の1階にあり、3才児～5才児クラスで、小さいグループに分かれて活動していた。9人が特別支援を必要とする子が在籍しているが、他の子と同じ環境の中で一緒に過ごしている。

毎年、10人ほどを特別支援の子を受け入れている。耳が聞こえる、椅子に座れるなどできれば受け入れるようにしている。特別支援の子と過ごすことで、子どもたちは人を助けてあげるなど、価値観が育ち、経験によって育っていく。

小学校に向けて、小学校に入れるよう（読み書きなどできるよう）にしている。朝の7時から夜の7時まで保育をしている。

中国語、英語両方覚えられるようにしている。先生も、中国語と英語の先生がいる。インド人や日本人の子もいるが、その子たちに対しても中国語、英語で行っている。

この施設はオープンコンセプト（壁などで仕切っていない）で、グループごとに遊んでいると、声などが聞こえてしまうが、子どもたちは気にしないで遊んでいる。

制作の中にお米を使ったものがあった。これは、インドの新年のお祝いのものでした。シンガポールは様々な国との関わりがあるので、4回新年を行っていますという話をされていた。

この日、ゲームなどに関する専門の先生が来て絵本を読んでいた。この先生は子どもたちがゲームなどばかりして過ごすことがないよう啓蒙活動を行っているということであった。

読んでいた本は、動物園に行った子がずっとゲームをしていたので、動物園の絵を描こうと言われた時に描けなかつた・・・というストーリーだった。

ゲームに夢中になってしまふ子に対して、ゲームを取り上げるのではなく、どのように使うことが良いか、お父さんやお母さんの話をちゃんと聞いて、ルールを守った上で使用することが望ましいということであった。物事の価値を理解できるように、責任を持ち、家族や目上の人に敬意を払えるようにすることが重要であるということであった。

特別支援の子に対して、小学校から依頼されれば、先生に電話などで様子を伝えている。気になる子について、親にはまず病院を紹介している。プログラムなどを受けるのにも、親の許可が必要となるので、拒否する親に対しては、退園してもらうが、ほとんどの家庭は受け入れてくれている。また、小学校に入るためには必要なことと伝えれば、保護者も理解してくれる。

2才を二回（二年）、3才を二回する子もいる。それも保護者に理解してもらってから行っている。

○E L Fプレスクール

住宅街の中にある施設。住宅街を保育園に変えた。N T U Cが母体で経営をしている。学童も行っていて、訪問した時には小学校の子どもたちが帰ってきていた。（小学校は昼までの授業が多く、学校でお弁当や食堂などでご飯を食べたら帰るようになっている。）

今回この施設案内してくれた先生は、視覚に問題がある子に対してのセラピストなど専門的な先生でした。

この園では朝食を出しているということだった。外で遊ぶ活動をした後には、英語・中国語の授業を行っているということだった。細かい作業の前に体を大きく動かすことが重要とされていた。

また、授業の中ではフラッシュカード（七田式）をしている。

4才児クラスでは、1～12まで数が数えられるようにと、代名詞とかを覚えるようにしている。社会性や、独立性を育てている。

5才児クラスでは、読書室でプロジェクターに絵本を映し出して、絵本を読んでいたりする。

また、フィンランドのような保育を目指しているということだった。

この園は、チャイルドケア・キンダーガーデンという日本の幼保と同じようなプログラムを組むようになっていた。最初はチャイルドケア（保育）のみだった。預かる時間帯や、料金が違う。5才まで昼寝を行っている。

掲示物が多いことに対して、自閉症の子に対しては、情報が入りすぎてダメなこともあるが、掲示することで学ぶ、また学ぶ意欲につながると信じて行っている。良いものは取り入れているが、それが必ずしも良いものとは限らない。

○感想○

施設を訪問する中で、通訳さんを介しての説明だったので、聞き取ることに最初は必死でしたが、段々とシンガポールの教育など様子が見えてくると、少しリラックスして聞けるようになってきて良かったです。やはり、自分の英語力のなさを痛感し、ヒヤリングや英会話の大切さを感じました。

施設で働く人の資格の中で、シンガポール政府は「理論だけでなく、技術を将来につなげる」ことを重要していると聞き、知識を持つことも重要だけれど、知識を備えた上で、技術を身に付けていくことが必要だと感じました。

小学校に行くためのガイドライン、教育水準が高いと感じました。けれど、遊びの中から興味を育てられるような環境をどこの施設も取り入れていたので、子どもたちは楽しみながら活動しているように見えました。机に向かって作業（学習ノート）などを行っている場面も見ましたが、その活動を取り入れる前後には、体を動かす時間を設けていました。子どもたちの様子を見ながら、カリキュラムを立てていると思いました。

国が違うと、文化も環境も違うので、どのような保育をしているかを見ることができて良かったです。国のことを使ってから、訪問すれば、もう少し違った視点からみることもできたのではないかと思います。また、シンガポールは自分の国に誇りをしっかりと持ち、それを子どもにも伝えているところは、日本とは違うと思いました。

保育園・幼稚園からセカンドランゲージを取り入れ、確立されているところは、すごいと思いました。どの園もまずは、「耳で聞くこと」というところを大切にしていたので、自然に触れられるよう、無理なく進めていると思います。自分も子どものときに英語に触れる環境が欲しかったなと思いました。

親や目上の人に対する敬意を持つというところで、ダメだからダメではなく、きちんとどうしていけないのかを話し合うことが大切であると話がありました。この当たり前のことが、段々と欠けていっている部分があるのかなと感じました。

障がい児に対する保護者の考え方も違い、その子のためと思うならば、必要な援助を受けようという心づもりがあるように思いました。日本では、世間体を気にしてしまう部分も大きいのかなと思います。その子の将来のことを思うならば、その子にあった援助など、対応できるような考えを持っていきたいと感じました。

今回色々な施設を訪問することができ、とても貴重な機会となりました。また、施設訪問ということで、緊張していましたが、どの施設も忙しい中、受け入れて下さって安心しました。施設を訪問しながら、私たちの保育にも興味を持って下さる施設もあったので、私たちの施設を伝えられる資料があれば良いと思いました（英語に訳すのは大変そうですが・・・）。